報　文

# 描画テストにおける軽度発達障害児の発達的研究
# ～星と波テストとワルテッグ描画テストを用いて～

大徳亮平[1]，西村喜文[2]

([1]児童養護施設浦上養育院，[2]西九州大学)

(平成17年12月8日受理)

**A Research of The Development of Children with Slight Developmental Disorders Through Drawing Test, Using Star - ware and Wartegg - Zeicher Test.**

Ryouhei DAITOKU[1] and Yoshifumi NISHIMURA[2]

( [1] *Children's Home Urakami Orphanage,* [2] *Graduate School of Health and Social Welfare Science, Nishikyushu University* )

(Accepted December 8, 2005)

**Abstract**

This research gives formal analysis of the development-feature of a healthy group and a group of the developmentally handicapped children in order to study an understanding of the development-feature of the children with developmental handicap, and the method of their assistance. Consequently, the star-wave-test showed that the developmentally handicapped children have the tendency to lay more stress on the internal things than the external things such as surroundings and relations with people, and that they emphasize the intellectual and mental side too much in their daily life. Moreover, in the Wartegg-zeichentest, ① the rich expression of their inner sides, which they fail to express in their daily life, was seen. ② The rate of an appearance of formal depiction about the theme evoked by all the plates was high. ③ The rate of an appearance of pictorial depiction for the plates which evoked emotion and susceptibility (2 and 7) was hign. Thus it was suggested that the emotions-approach which can nestle up to their feeling and emotion is required as a clue to the support for the developmentally handicapped children who have a maladjustive feeling in personal relations and are poor at expressing themselves.

Key words: developmental support 発達支援
slight developmental disorders 軽度発達障害
thes tar waye test 星と波テスト
the Wartegg zeichen test ワルテッグ描画テスト

## 1．目　　的

現在保育場面や学校場面において、知的能力には全く問題がないのに対人場面においてうまく関係を作っていけない軽度発達障害児が注目されている。軽度発達障害の特徴に関して専門知識の不足や療育体制の不十分さも指摘されており、障害に対する理解や対応のまずさから対対人関係においても不適応を起こすと述べてられている。これら軽度発達障害をもつ子ども達は、行動上の問題が多く、社会性も未熟であり孤立しやすい。また感情が未熟で不安定であり、ストレスなどに対する耐性や抵抗力が弱いため情緒障害をおこしやすいと捉えられている。よって二次的な問題のためにいじめ、不登校、孤立、非行等にいたることも考えられる。このように二次的な情緒障害に対する支援が必要とされている。先行研究として、行動療法（木田・2001）、グループアプローチ（清水・2004）（大嶋ら・2004）や心理劇（高原・2004）といった集団精神療法、またイルカ介在療法（遠山・2003）などのアプローチがなされている。しかし、描画を用いた実践は、人物画（末次・2003）や、自由画（2002・川崎）（近藤・2003）など実践は少ない。

杉山（2002）は、「描画によって子どもが表出されるというレベルを超えて、描画そのものが、子どもの生きる世界をわれわれに見せる優れた窓としての機能を果たしている」と述べ、また鈴木（2001）は、「描画テストは、言語を用いるテストと異なり、手を動かしさえすれば表現できるところから、被験者が特別に意識しなくても、比較的容易に心の内界を記録できる（意味表出）と同時に、そもそも我々は絵を描くこと自体が楽しく解放感を味わえる（カタルシス効果）のである」としている。

そこで描画という非言語的アプローチ（nonverbal approach）を通して軽度発達障害児の内的世界を表出し、そのことが現実世界での葛藤、不安感を和らげるという仮説のもと、描画により子どもたちの内界と関わることは、二次的障害の軽減、また予防の意味でも有効であると思われる。投影法描画テストである星と波テストは、特定の集団や外界に対する適応能力や個々の個性を見出すこと、また障害の兆候を示唆できるとされている。先行研究としては、杉浦ら（1998）の発達機能テストとして3歳児から7歳児への統計的研究、個別のケースとして知的障害者、言語障害者および不登校児などへの実施はあるものの軽度発達障害児への実践はない。またワルテッグ描画テストは描かれたものから、図版のテーマへの反応や態度が理解される。先行研究として渥美（1960）の神経症患者への実践、入江（1966）の統合失調症者への実践がある。健常者へは正保（1991）の中学生、柳ら（2001）の大学生への実践などがあるが、軽度発達障害児への実践はない。そこで投影法描画テストである星と波テスト、ワルテッグ描画テストを健常児群と軽度発達障害児群のそれぞれに実施し、発達障害を持つ子どもの発達的特徴の理解、援助の方法について考察する。

## 2．方　　法

（1）第1調査

星と波テスト（SWT）を用いて各年齢群の発達段階の特徴を明らかにする。健常児群と軽度発達障害児群とを形式分析によって比較する。

① 対象

健常児：199名（小学1年から6年生）

軽度発達障害児：17名（自閉症、アスペルガー症候群、LD、ADHD）（表1・表2）

表1　調査対象の実数と内訳（健常児群）

| 学　年 | 男 | 女 | 計 |
|---|---|---|---|
| 小 1 | 18名 | 12名 | 30名 |
| 小 2 | 20名 | 19名 | 39名 |
| 小 3 | 17名 | 14名 | 31名 |
| 小 4 | 17名 | 16名 | 33名 |
| 小 5 | 17名 | 16名 | 33名 |
| 小 6 | 14名 | 19名 | 33名 |

表2　調査対象の実数と内訳（軽度発達障害児群）

| 診　断　名 | 学年群 | 男 | 女 |
|---|---|---|---|
| アスペルガー症候群及び高機能自閉症 | 低学年群 | 1名 | 1名 |
| | 高学年郡 | 5名 | 1名 |
| 学　習　障　害 | 低学年群 | 2名 | |
| | 高学年郡 | 1名 | 1名 |
| 注意欠陥多動性障害 | 低学年群 | | |
| | 高学年郡 | 2名 | |
| 未　診　断 | 低学年群 | | 2名 |
| | 高学年郡 | 1名 | |
| 計 | | 12名 | 5名 |

② 調査日

健常児：平成16年2月10日

軽度発達障害児：平成16年4月から8月

③ 調査方法

健常児：学級ごとに星と波テスト（SWT）を1授業時数（45分間）で集団実施した。

軽度発達障害児：S市子ども発達センター及びS県軽度発達障害児YグループおよびGグループ、S市軽度発達障害児フリースクールにて個別実施した。

④　手続き

黒い長方形の枠の印刷されたＡ５判の用紙と鉛筆をわたし、「海の波の上に星空を描いてください」と教示した。

⑤　分析方法

「絵の分類」「空間象徴」「空間構造」「物の象徴」「筆跡」のパターンに分析し、健常児、軽度発達障害児の発達的特徴の把握および学年または学年群ごとの出現率による比較検討を行った。

（２）第２調査

ワルテッグ描画テスト（WZT）を用いて各年齢群の発達段階の特徴を明らかにする。健常児群と軽度発達障害児群とを形式分析によって比較した。

①　対象

健常児：199 名（小学１年から６年生）

軽度発達障害児：１７名（自閉症、アスペルガー症候群、ＬＤ、ＡＤＨＤ）（表１･表２）

②　調査日

健常児：平成 16 年２月 10 日

軽度発達障害児：平成 16 年４月から８月

③　調査方法

健常児：学級ごとにワルテッグ描画テスト（WZT）を１授業時数（45 分間）で集団実施した。

軽度発達障害児：Ｓ市子ども発達センター及びＳ県軽度発達障害児Ｙグループおよび Ｇグループ、Ｓ市軽度発達障害児フリースクールにて個別実施した。

④　手続き

黒い長方形のなかが８つに仕切られ、それぞれ刺激図の書いてあるＡ５判の用紙と鉛筆をわたし、「それら８つの枠すべてに何か描いてください」と教示する。

⑤　分析方法

「刺激図への反応」「絵の分類」「筆跡」のパターンに分析し、健常児、軽度発達障害児の発達的特徴の把握および学年または学年群ごとの出現率による比較検討を行った。

## ３．結　　果

今回の研究では、第１調査として、星と波テスト、第２調査として、ワルテッグ描画テストにおける健常児及び軽度発達障害児の発達的特徴の分析を試みた。

（１）第１調査・星と波テスト

アヴェ＝ラルマン（Ave-Lallemant,U.・2000）による解釈の５段階を用い分析を行った。

＜健常児群＞

①　絵の分類

５つのパターン（要点のみ、絵画的、感情的、形式的、象徴的）と学年との間に関連性があることがいえた（$\chi^2$=28.136, df=15, p＜.05）（図１－１）。要点のみ、絵画的なパターンが多くみられ、低学年では豊かな経験を表現しようとする絵画的パターン、高学年になるにつれ教示内容を素直に理解しテーマを処理する要点のみの表現パターンがみられた。

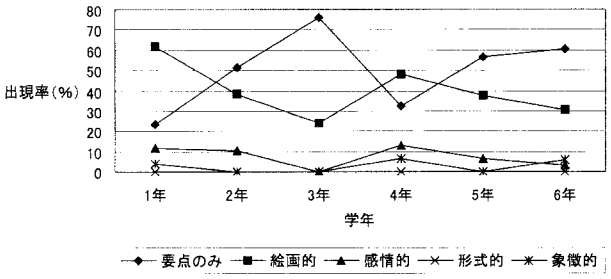


図１－１　星と波テスト　絵の分類

②　空間構造

４つの空間構造（調和、並置、規則性、不調和）と学年との間に関連性があることがいえた（$\chi^2$=29.163, df=15, p＜.015）（図１－２）。並置な描写が多く出現するが、学年があがるにつれ調和のとれた描写が多くなりバランスのある描写へと変化してきており、内的な成熟がみられ、海優位な描写、空優位な描写そして空と海の間に隔たりのある描写が多く出現していることがわかった。

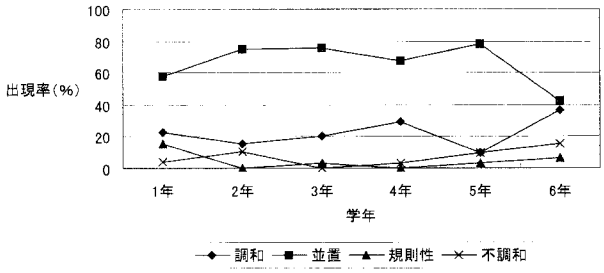


図１－２　星と波テスト　空間構造

③　空間象徴表現・垂直

垂直的な構造（バランス、空優位、海優位、隔たり、中間強調、混在）と学年との間に関連性があることがいえた（$\chi^2$=45.533, df=20, p＜.01）（図１－３）。中間を強調している絵はみられなかった。

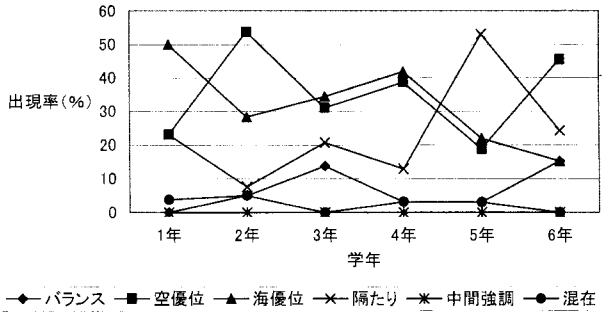


図１－３　星と波テスト　空間象徴表現・垂直

④　空間象徴表現・水平

水平的な構造（強調なし、左強調、右強調、中央強調）と学年との間には関連性はみられなかった。

⑤　物の象徴

４割が付加物を描き、描画を楽しみながら、自身の豊かな感情表現をあらわしていると思われた。

⑥　筆跡

筆跡のそれぞれのパターンを学年でみてみると、描線のはこびでは低学年から動きのある描線が多く、高学年になると安定した描線がみられていた。また線の特徴では、学年との関連性がうかがえた（$\chi^2$=, df=, p＜.01）（図１－４）。学年をとおして、しっかりした筆跡がもっとも多く出現し、繊細な筆跡は中学年までに多く出現していた。また平面の処理では、健常児の約３割が行っていた。

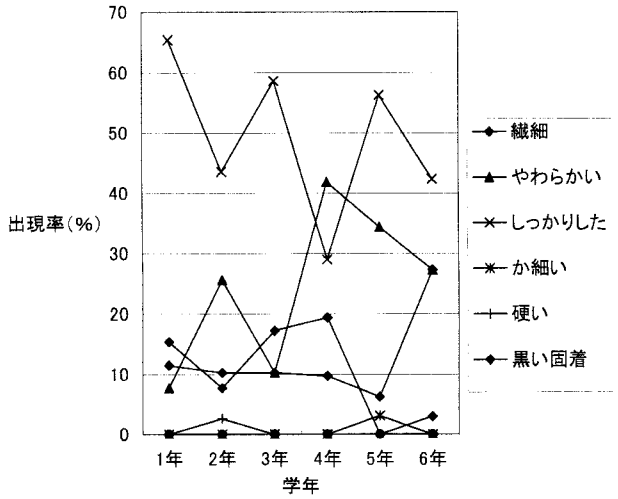


図１－４　星と波テスト　筆跡（線の特徴）

＜軽度発達障害児群＞

サンプル数が少ないため、学年ごとではなく低学年群（小学校１年生から３年生）、高学年群（小学校４年生から６年生）ごとに統計処理を行った。

①　絵の分類

５つのパターンにわけられた絵の分類を学年でみてみると、学年群をとおして、関連性はみられなかった。健常児群と同様に要点のみ、絵画的なパターンが多くみられたが、感情的表現パターンは出現せず、情緒的要素が優位に立ちにくい傾向が伺えた。

②　空間構造

４つの空間構造を学年でみてみると、学年群をとおして、関連性はみられなかった。調和が見られず、自分自身をコントロールする内的な成長の未熟さもみられた。

③　空間象徴表現・垂直

垂直的な構造を学年でみてみると、学年群をとおして、関連性はみられなかった。バランスのとれた描写、空優位な描写が多く、知的・精神的側面と感情的・身体的側面のバランスがとれていることも考えられたが、他方、知的・精神的な側面を過度に強調している状態も伺えた。

④　空間象徴表現・水平

水平的な構造を学年でみてみると、学年群をとおして、関連性はみられなかった。左側を強調する描写がみられ、周囲の事物や人との関係、外的なものより、内的な部分に重きを置く傾向が伺われた。

⑤　物の象徴

健常児同様豊かな感情表現がみられた。

⑥　筆跡

筆跡のそれぞれのパターンを学年でみてみると、学年

表３　星と波テストにおける比較

| 健　常　児　群 | 軽度発達障害児群 |
|---|---|
| 【絵の分類】<br>・１年生では絵画的な絵が多くみられ、高学年になると要点のみの絵が上まわる<br>・感情的な絵は女児に多く、象徴的な絵は男児に多くみられる | 【絵の分類】<br>・要点のみ、絵画的な描写が多い |
| 【空間構造】<br>・並置が多くみられ高学年になると調和的なものになっていく<br>・調和のとれた描写は男児より女児に多い | 【空間構造】<br>・並置な描写が多い |
| 【空間象徴表現（垂直）】<br>・海が優位の描写は年齢とともに空優位な描写へと変化する<br>・海優位は男児に多く、バランスのとれた描写は女児に多い | 【空間象徴表現（垂直）】<br>・バランスのとれた描写が多い |
| 【空間象徴表現（水平）】<br>・左右の強調は中学年で最も多く出現し、学年とともに収束する<br>・左、中央の強調は男児に多い | 【空間象徴表現（水平）】<br>・左強調の出現率が高い |
| 【物の象徴】<br>・月の出現率が高い | 【物の象徴】<br>・半数が付加物を描いている |
| 【筆跡】<br>・不安定なはこびは２年生に多い<br>・しっかりした筆跡はもっとも顕著に現れる<br>・繊細な線、やわらかい線は高学年になるにつれ増加する<br>・黒い固着は６年生で急激に増加する | 【筆跡】<br>・２割が平面処理を行う |

群をとおして、関連性はみられなかった。線の特徴においてか細い筆跡もみられ、健常児に比べ障害児は、感受性、感覚の鋭さや傷つきやすさ、もろさを抱いていると考えられた。

第1調査の結果（表3）から、軽度発達障害児の特徴として、絵の分類においては、健常児に比べ感情的表現パターンの出現が少なく、また調和の表現がみられなかった。空間構造では、バランスのとれた描写、空優位な描写が多く出現した。空間象徴表現の垂直面では、左側を強調した描写の出現率が高かった。筆跡では、健常児にはみられないか細い筆跡が出現していた。平面処理はすべて線影をつけるであった。

（2）第2調査・ワルテッグ描画テスト

アヴェ＝ラルマン（Ave-Lallemant, U.・2000）による解釈法を用い分析を行った。

＜健常児群＞

① 刺激図への反応

反応の有無を学年でみたが、関連性はみられなかった。

② 絵の分類

学年が上がるにつれ、要点のみの描写の出現率は減少し、絵画的な描写の出現率の増加がみられた。また、低学年において形式的な描写が多くみられた。性差においては男児より女児に絵画的な描写が多くみられた。また図版1以外のすべてで、5つのパターンにわけられた絵の分類と学年群の間に関連性があることがいえた。

図版2（図2－1）において、5つのパターンを学年でみてみると、関連性がみられた。各学年を通して要点のみが多くみられる（$\chi^2$=28.446, df=20, p＜.001）。

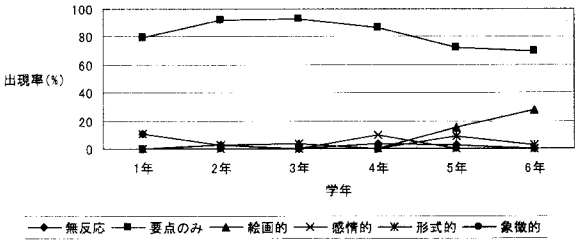


図2－1　ワルテッグ描画テスト絵の分類　図版2

図版3（図2－2）において、5つのパターンを学年でみてみると、関連性がみられた（$\chi^2$=47.638, df=20, p＜.001）。各学年を通して要点のみが多くみられ、高学年になるにつれて、絵画的が増えてくる。

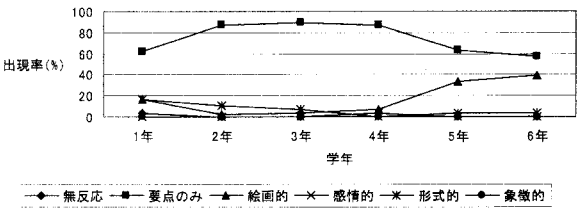


図2－2　ワルテッグ描画テスト絵の分類　図版3

図版4（図2－3）において、5つのパターンを学年でみてみると、関連性がみられた（$\chi^2$=47.751, df=15, p＜.001）。各学年を通して要点のみが多くみられ、高学年になるにつれて、絵画的が増えてくる。

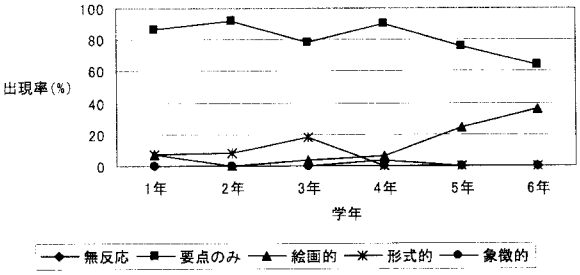


図2－3　ワルテッグ描画テスト絵の分類　図版4

図版5（図2－4）において、5つのパターンを学年でみてみると、関連性がみられた（$\chi^2$=62.940, df=20, p＜.001）。各学年を通して要点のみが多くみられ、高学年になるにつれて、絵画的が増えてくる。

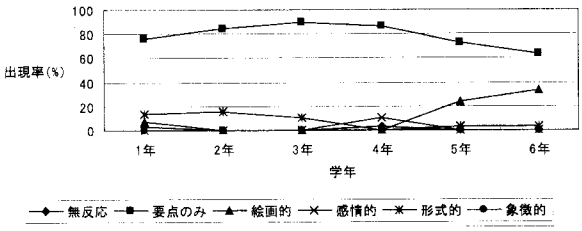


図2－4　ワルテッグ描画テスト絵の分類　図版5

図版6（図2－5）において、5つのパターンを学年でみてみると、関連性がみられた（$\chi^2$=72.009, df=20, p＜.001）。要点のみが学年をとおして最も多いが、中学年にかけて形式的の出現も多くみられる。

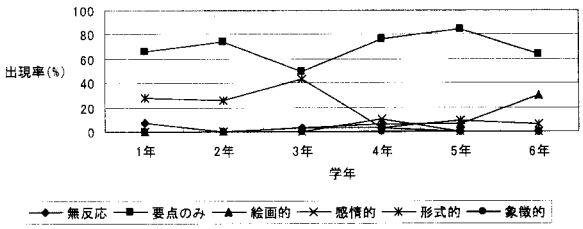


図2－5　ワルテッグ描画テスト絵の分類　図版6

図版7（図2－6）において、5つのパターンを学年でみてみると、関連性がみられた（$\chi^2$=61.296, df=20, p＜.001）。各学年を通して要点のみが多くみられ、高学年になるにつれて、絵画的が増えてくる。

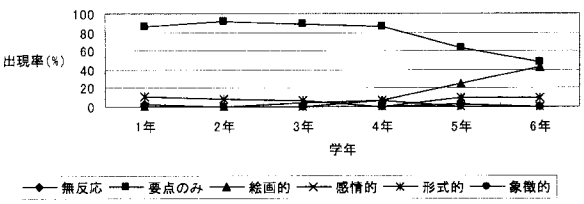


図2－6　ワルテッグ描画テスト絵の分類　図版7

図版８（図２－７）において、５つのパターンを学年でみてみると、関連性がみられた（$\chi^2$=39.013, df=15, p＜.01）。各学年を通して要点のみが多くみられ、高学年になるにつれて、絵画的が増えてくる。

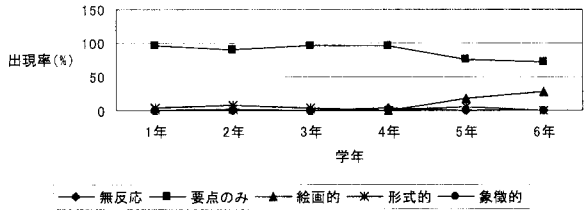


図２－７　ワルテッグ描画テスト絵の分類　図版８

③　筆跡

線の特徴（図２－８）において、学年との間に関連性がみられた（$\chi^2$=48.559, df=30, p＜.05）。しっかりしたが最も多く、やわらかいは、高学年になるにつれ出現率が高くなった。

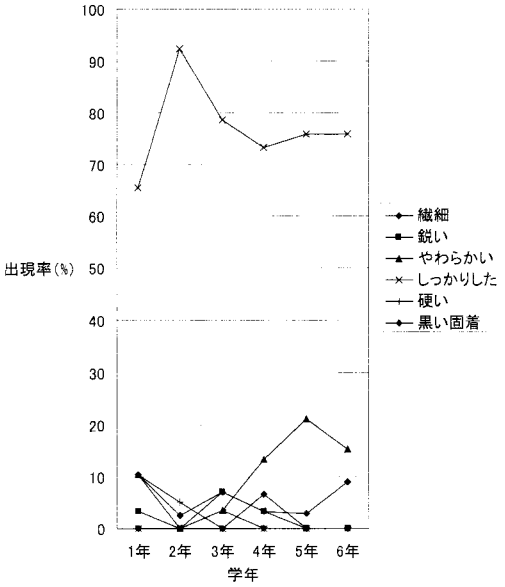


図２－８　ワルテッグ描画テスト　筆跡（線の特徴）

表４　ワルテッグ描画テストにおける比較

| 健　常　児　群 | 軽度発達障害児群 |
|---|---|
| 【刺激図への反応】<br>・反応ありは９割を超える | 【刺激図への反応】<br>・反応ありは９割を超える |
| 【図版１】<br>・要点のみの絵が多い | 【図版１】<br>・要点のみの出現率（特に高学年）が高い |
| 【図版２】<br>・要点のみの絵が多い<br>・絵画的な絵は女児に多い | 【図版２】<br>・要点のみと絵画的な描写が多い |
| 【図版３】<br>・要点のみが多い<br>・高学年になると要点のみは減少する<br>・低学年に形式的な描写がみられる<br>・男児は女児より形式的な絵を描く | 【図版３】<br>・要点のみの描写が多い<br>・形式的表現が出現した |
| 【図版４】<br>・要点のみが絵が多い<br>・高学年になると絵画的な描写が多くなる<br>・形式的な絵が低学年にみられる<br>・男児の形式的な描写、絵画的な描写は女児より多く要点のみは低い | 【図版４】<br>・要点のみ、絵画的、形式的な描写がみられた |
| 【図版５】<br>・要点のみの描写が多く、中学年を境に減少し、絵画的な描写が増加する<br>・女児は男児に比べ絵画的な描写が多い | 【図版５】<br>・要点のみ、絵画的、形式的な描写がみられた |
| 【図版６】<br>・要点のみの描写は、高学年になると減少し、絵画的な描写は高学年で増加する<br>・低学年に形式的な描写の出現が高い<br>・形式的な描写が女児は男児より出現率が高い | 【図版６】<br>・要点のみ、絵画的、形式的な描写がみられた |
| 【図版７】<br>・要点のみの描写が多い<br>・高学年になると絵画的な描写が増える<br>・男児は女児に比べ要点のみ、形式的な描写が多く、絵画的な描写は低い | 【図版７】<br>・要点のみ、絵画的、形式的な描写がみられた |
| 【図版８】<br>・要点のみの描写各学年高い<br>・高学年になるにつれ絵画的描写増える<br>・低学年に形式的な描写がみられる<br>・絵画的な描写が男児に高い | 【図版８】<br>・要点のみ、絵画的、形式的な描写がみられた |
| 【筆跡】<br>・高学年になるにつれやわらかい筆跡が増える<br>・硬い筆跡は低学年にみられる | 【筆跡】<br>・高学年がより安定した描線だった<br>・しっかりした線が半数だった<br>・半数の児童が平面処理をしていた |

＜軽度発達障害児群＞

① 刺激図への反応

反応の有無を学年群でみたが、関連性はみられなかった。

② 絵の分類

学年群をとおして、関連性はみられなかった。健常児と同様に、要点のみのパターン、絵画的なパターンがみられるが、形式的な描写が多くみられた。

③ 筆跡

描線のはこびでは、高学年群になると安定した筆跡の出現が増し、線の特徴では、半数がしっかりしたであった。平面の処理では、半数が処理を行い、すべて陰影をつけるであった。

第2調査の結果（表4）から、軽度発達障害児の特徴として、刺激図への反応は、健常児と同様に9割にみられた。絵の分類では、健常児にはあまりみられない形式的な絵の出現がみられた。筆跡では、高学年になるにつれ、安定した筆跡がみられ、平面処理は、すべて陰影をつけるで約半数にも及んだ。

## 4．考　察

（1）第1調査の考察

① 絵の分類

杉浦（2000）は、星と波テストにおける要点のみの表現パターンとは、非常に簡素で、指示どおりに単に星と波だけが描かれているものであると述べている。このような反応は美しく描くとか特別な意図や細部を注意深く描こうという意図に乏しく、感情的に左右されないただ与えられたテーマを処理しているパターンである。反対に絵画的パターンはひとつの絵画作品的な印象を与え、そのためには感情的な豊かさが必要とされる。今回の絵の分類では、健常児群の発達的特徴として要点のみの表現パターンと絵画的表現パターンに学年との関連性がいえた。低学年では絵画的表現パターンが多く出現し、高学年になるにつれて要点のみの表現パターンになる傾向がみられた。このことより、低学年では豊かな経験を表現しようという意図を持ち描こうとし、高学年になるにつれ教示内容を素直に理解しテーマを処理しているといえる。軽度発達障害児群に関しても同様のことがいえた。しかし、低学年群の比較によると、軽度発達障害児群には感情的表現パターンは出現しなかった。軽度発達障害児は健常児より情緒的な要素が優位に立ちにくいととらえられる。

② 空間構造

杉浦（2000）は、空間構造は空間の中でのバランスを見るものであるとしている。健常児群の発達的特徴として並置な描写が多く出現するが、学年があがるにつれ調和のとれた描写が多くなりバランスのある描写へと変化してきている。それと同時に不調和も見られるようになってきている。しかし、軽度発達障害児群においては、ほとんどが並置で調和の表現パターンはみられなかった。星と波テストにおける調和のとれた描写とは、自然に成長した有機体のような星と波のことで、精神内界からもたらされるものである。それは、描画を行った人の心的な調和とバランスがもたらしたもので洗練されたパーソナリティの一端をあらわすといわれている。軽度発達障害児群に調和が見られず、並置が多いということは、自分自身を上手にコンロトールする内的な成長の未熟さも伺える。

③ 空間象徴表現・垂直

空間象徴的な使い方の垂直面では、健常児の発達的特徴として、海優位な描写、空優位な描写そして空と海の間に隔たりのある描写が多く出現している。その中でも、海優位は学年があがるにつれ減少し男児に高く出現した。またバランスのとれた描写は女児のほうが高く出現している。海優位とは、空間的に海が優位に描かれていることであり、感情的側面を重視するとされている。空優位とは、知的、精神的側面の強調とされている。バランスがとれている描写とは、空と海の間のバランスがとれていることで、知的・精神的側面と感情的・身体的側面のバランスが自然にとれていることを示している。隔たりのある描写とは空と海との2つの側面が分離されているものである。しっかりとした知性が感情面をコントロールしようとしていることをあらわしている。遠藤（1981）は自己意識について、女児が男児よりも早くから自己意識に安定性をもつと述べており、その自己意識の安定性が女児は男児よりバランスのとれた描写となり、男児は女児より海優位の描写することに反映されていると思われる。また軽度発達障害児群に関してはバランスのとれた描写、空優位な描写が多く、知的・精神的側面と感情的・身体的側面のバランスがとれていることも考えられるが、他方、知的・精神的な側面を過度に強調している状態もうかがえる。

④ 空間象徴表現・水平

空間象徴的な使い方の水平面では、健常児の発達的特徴として学年をとおして左右の強調した描写が中学年で多く、学年があがるにつれ収束している。また男子に左強調が多く見られる。軽度発達障害児群に関しては、左強調の出現が高い。星と波テストにおける左優位とは描画者の内向的領域の体験が外向的領域の体験に比べてより主題的になっていることを示している。このことより健常児の中学年における左右の強調の出現は、前思春期の自我の発達とも関係があると思われる。また、軽度発達障害児群においては左側を強調する描写がみられ、周囲の事物や人との関係、外的なものより、内的な部分に

重きを置く傾向があることも考えられる。

⑤　物の象徴

物の象徴では、割合でみると健常児は4割、軽度発達障害児では半数が何かの付加物を描いた。これは描画を楽しみながら、自身の豊かな感情表現をあらわしていると思われる。

⑥　筆跡

ア）描線のはこび

筆跡の描線のはこびでは、健常児の発達的特徴として低学年から動きのある描線が多く、高学年になると安定した描線がみられてくる。星と波テストにおいて動きのある描線とは力を抜いて、自分特有のリズムに身をゆだねることができる人で、生活過程に渋滞がないことを示唆している。また安定した描線とは迷うことなく目標に進み、目標に達することであり、こだわりなく、落ち着いていて、おそらくすぐにはいらいらしない人であると示唆できる。このことより豊かに自分らしく描画表現をしたことが示唆され、高学年になると安定した描写が出現したのは自己意識の安定がもたらしたともいえる。軽度発達障害児群にも同様のことがいえた。

イ）線の特徴

線の特徴では、健常児の発達的特徴として学年をとおして、しっかりした筆跡が多く出現している。また繊細な筆跡は中学年までに多く出現している。アヴェ＝ラルマン（Ave-Lallemant,U.）によると、星と波テストでは、しっかりした筆跡とは、生得的な、自然で自発的な態度を示すとし、やわらかい筆跡と繊細な筆跡は、感受性が優位であることを示唆する。また、その際に繊細な線は、感情移入傾向と鋭敏な感覚を、官能的な感受性と著しい感覚の鋭敏さを示唆するとしている。これより、学年をとおしてみられたしっかりした筆跡は、ものごとに自然体で自発的に取り組む姿勢が示唆され、また低、中学年における繊細な筆跡は、感じたものをありのままにとらえる豊かな感受性を持つことを示唆している。

また軽度発達障害児群においても同様のことがいえた。しかし、健常児にはみられなかったか細い筆跡が出現しており、アヴェ＝ラルマン（Ave-Lallemant,U.2000）によるとか細い筆跡とは、感情の過敏さを示し、障害の疑いと傷つきやすさを併せもっているとしている。このことから、健常児に比べ障害児は、感受性、感覚の鋭さや傷つきやすさ、もろさを抱いていることが示唆される。

ウ）平面の処理

平面の処理では、健常児群の約3割、軽度発達障害児群では2割の児童が平面処理を行っていた。健常児群、軽度発達障害児群とも線影をつけるが最も多く、軽度発達障害児群の平面処理はすべて線影をつけるであった。アヴェ＝ラルマン（Ave-Lallemant,U.2000）によると線影をつけるとは、感じとられた内容を思想として貫徹にすることを示し、理性と感情の統制の表れとしている。また、杉浦（2000）は、意識的に内容の表現をすることであるとしている。このことから、描画することにとけこみ、自身の感じられたものを描画に表現したのではないかと思われる。また色彩をつける代わりとも考えられる。

（2）第2調査の考察

①　刺激図への反応

健常児群は、与えられた刺激図に対してほとんどが反応を示しているが、高学年においてわずかに刺激図に対して反応していない。軽度発達障害児群に対しては、低学年、高学年若干の反応が見られない傾向があった。しかし、サンプル数が少なく今後さらに検討しなければいけない。

②　絵の分類

ア）図版1

図版1では健常児群の発達的特徴として、要点のみの描写が多くみられた。また、軽度発達障害児群においても同様のことがいえた。しかし、健常児群と障害児群の低学年群を比較すると、軽度発達障害児群に形式的な描写の出現率が高かった。ワルテッグ描画テストにおいて図版1には、自我と安心感のテーマがあり、形式的な描写をするということは、中心性を見出すことや集中性というテーマに反応しにくいということも考えられる。

イ）図版2

図版2では、健常児群の発達的特徴として、学年が上がるにつれ要点のみの描写の出現率は減少し、絵画的な描写の出現率の増加がみられた。また、性差をみると女児のほうが絵画的な描写の出現率が高かった。ワルテッグ描画テストにおいて絵画的な描写とは総じて情動的すなわち感情表現の反応を見るものである。この曲線の刺激図は、学年があがるにつれ感情表現を促すテーマがある刺激図といえる。そして、女児の絵画的な描写が男児より出現率が高いのは、星と波テストの項で述べたように、男児よりも早くから自己意識に安定性をもつことが考えられる。また、高学年群においては軽度発達障害児群の絵画的な描写の出現率が健常児群より高い。軽度発達障害児にとって、曲線の刺激図と感情表出とに関係があるのではないかと思われる。

ウ）図版3

図版3では、健常児群の発達的特徴として、各学年とも要点のみの描写の出現率が高く、高学年になるにつれて絵画的な描写が有意に出現した。また、低学年においては形式的な描写も出現した。図版3のテーマは、達成であり、描線には「上昇」を促すものが内在しており、この図形への反応は強い目的志向を表すとされる。高学年において絵画的な描写の出現率が増加し、低学年にお

いて形式的な描写が出現したのは、高学年がより具体的な目的を持ちやすいことも考えられる。軽度発達障害児においては、形式的な描写の出現率は高く、具体的な目的を持ちにくい状態であるかもしれない。

エ）図版4

図版4では、健常児群の発達的特徴として、各学年とも要点のみの描写の出現率が高く、高学年になるにつれて要点のみの描写が減少し、絵画的な描写が有意に出現した。また、低学年においては形式的な描写も出現した。また、性差をみると女児のほうが絵画的な描写の出現率が高かった。図版4のテーマは問題への対処がテーマであり、高学年において、刺激図を取り込もうとする力ができはじめたのかもしれない。低学年において形式的な絵の出現は、問題への対処の難しさとも受け取れる。軽度発達障害児群においても同様に要点のみ絵画的な描写が多く出現している。しかし、形式的な描写の出現率は健常児群と比べると高く、問題への対処に困難を抱えることが考えられ、日常場面でも同じようなことがいえる。

オ）図版5

図版5では、健常児群の発達的特徴として、図版5と各学年との関連性がいえた。特に要点のみの描写の出現率が高く、高学年になるにつれて要点のみの描写が減少し、絵画的な描写が出現した。また、低学年においては形式的な描写も出現した。また、性差をみると女児のほうが絵画的な描写の出現率が高かった。図版5のテーマは緊張・力動性である。高学年において要点のみの描写が減少し、絵画的な描写が増加したのは、年齢とともに精神的・身体的にもエネルギーが活性化していくこととイメージの活性化と関係があるのではないかと思われる。低学年において形式的な絵の出現は、イメージを喚起させられにくいためのように思われる。女児のほうが絵画的な描写の出現率が高かったのは、星と波テストの項で述べたように、男児よりも早くから自己意識に安定性をもつことが考えられる。軽度発達障害児群においても同様に要点のみ絵画的な描写が多く出現している。しかし形式的な描写の出現率は健常児と比べると高く、身体的・精神的エネルギーをうまくコントロールできないことが刺激図に対してうまくイメージをしにくいと捉えられる。

カ）図版6

図版6では健常児群の発達的特徴として、図版6と各学年との関連性がいえた。特に要点のみの描写の出現率が高く、高学年になるにつれて要点のみの描写が減少し、絵画的な描写が出現した。また、形式的な描写が低学年、高学年両方に出現した。性差をみると要点のみ、絵画的描写において差はないが、女児より男児に多く形式的な描写が出現した。図版6のテーマは完全性・統合であり、この図版でははじめて高学年に出現率が多くみられており、現実的にものごとを統合させていく、完全性をもとめていくことの難しさがあらわれているかもしれない。軽度発達障害児群においても健常児群と同様に要点のみ、絵画的な描写の出現率が高いが、形式的な描写も多く、ものごとを結び付けて考えるような統合性に困難を抱えていると思われる。

キ）図版7

図版7では健常児群の発達的特徴として、図版7と各学年との関連性がいえた。特に要点のみの描写の出現率が高く、高学年になるにつれて要点のみの描写が減少し、絵画的な描写が出現した。また、形式的な描写が低学年、高学年両方に出現した。性差をみると絵画的描写において女児が男児より出現率が高く、女児より男児に多く要点のみ、形式的な描写が出現した。図版7のテーマは感受性であり、女児の方が情感の柔らかさを感じとる能力が引き出されやすいことが示唆できる。また、低学年群においては軽度発達障害児群の絵画的な描写の出現率が健常児群より高く有意に差がでた。図版2と同様に障害児にとって、曲線の刺激図と感情表出とに関係があると思われる。

ク）図版8

図版8では健常児群の発達的特徴として、図版8と各学年との関連性がいえた。特に要点のみの描写の出現率が高く、高学年になるにつれて要点のみの描写が減少し、絵画的な描写が出現した。形式的な描写が低学年に出現した。また、絵画的な描写は女児に多く出現している。軽度発達障害児群では低学年において形式的な描写の出現率が高かった。図版8は図版1と同様中心に描かれているアーチ型の曲線であり、「安心感」というテーマを喚起する。図版1の中心性と関連付けて考察する必要があり今後の課題である。

③　筆跡

ア）描線のはこび

描線のはこびでは、健常児群の発達的特徴として安定した描線が多くみられた。それに対し軽度発達障害児群では、低学年において不安定な描線の出現率が高い。アヴェ＝ラルマン（Ave-Lallemant,U.）によると不安定な線は、ためらいながら形を描き目標に向かっている描画者であり、いらだちやすく、自信がなく優柔不断になっていると想像され、また障害の兆候を示唆するとしている。障害児の低学年において、不安感やためらい、自信のなさが伺える。

イ）線の特徴

線の特徴では、健常児群の発達的特徴として学年をとおして、しっかりした筆跡がもっとも多く出現している。また、低学年に硬い筆跡がみられ、中学年から高学年にかけてやわらかい筆跡も出現している。黒い固着が各学年で出現している。星と波テストと同様にしっかりした筆跡とは、生得的な、自然で自発的な態度を示し、やわ

らかい筆跡と繊細は、感受性が優位であることを示唆する。またアヴェ＝ラルマン（Ave-Lallemant,U.）によると硬い筆跡は、考えが一方的に合理的で、極端に鋭い意志を推測させるとしているが、低学年に現れていることから自己コントロール感の希薄さによると思われる。黒い固着は、葛藤を示唆しており、８つのいずれかの誘発線に喚起されたと思われる。軽度発達障害児群では、低学年に健常児ではみられなかった繊細、鋭い、か細い筆跡が出現しており、高学年においては硬い筆跡がみられる。特に、か細い、硬い筆跡は障害の兆候が考えられる。こわれやすさや、もろさそして一方的に合理的な極端に鋭い意志が考えられ、不安定さや柔軟な意志の伝達に困難さを持つことが考えられる。

ウ）平面の処理

平面の処理では、健常児群の８割、軽度発達障害児群では約５割の児童が平面処理を行っていた。また軽度発達障害児群の高学年は８割が行っていた。健常児群、軽度発達障害児群とも線影をつけるが最も多く、軽度発達障害児群の平面処理は星と波テストと同様にすべて線影をつけるであった。このことから、描画することにとけこみ、自身の感じられたものを描画に表現したのではないかと思われる。また色彩をつける代わりとも考えられる。

## ５．まとめ

星と波テストは、発達機能テストとしての有用性が述べられ（Ryhner,Bruno ら・2000、Ave-Lallemant,U.・2003)、杉浦ら（1998）は、子どもの描画から、機能の発達段階評価ができるとしている。健常児と軽度発達障害児における発達的特徴に違いがみられ、本研究においても知見が裏付けられた。また、本研究から健常児、軽度発達障害児の描画にどのような傾向がみられるか明らかになったと思われる。

ワルテッグ描画テストは、人格診断テストとしての有用性が述べられており（Ave－Lallemant,U.・2002)、本研究は、児童期における健常児、軽度発達障害児の発達的特徴を明らかにした点で意義深いものと思われる。

星と波テストにおいて、健常児との比較により発達障害児には、周囲の事物や人との関係というような外的なものよりも内的な部分に重きを置く傾向がみられ、また生活場面においては知的・精神的な側面を過度に強調している状態がうかがえた。現実社会に身を置くことへのきつさも考えられた。そして、感情の過敏さのために現実場面での不適応感を抱えそれを処理していくための自己をコンロトールする力も未熟であることがうかがえた。また、ワルテッグ描画テストにおいては、全ての図版をとおして、喚起されるテーマに対して形式的な描写の出現率が高く、それぞれの図版への反応のしにくさを呈していた。それぞれの図版が喚起するテーマは人格の要素と関連しており、形式的な図版が多くみられたことは、それぞれのテーマへの対しにくさ、受け入れ難さを抱えていると思われる。また、感情、感受性を喚起される図版（２および７）に対し、絵画的な描写の出現率が高くみられたことは、アヴェ＝ラルマンが図版２および７は、独自の感じ方で周囲の世界を取り入れる貴重なアンテナにあたる（Ave－Lallemant,U.・2002）と述べているように、日常場面でなかなか表現できずにいる彼らの豊かな内面の表出がなされたと思われる。また、形式的な描写による反応をしやすいことから、軽度発達障害児に対しては、彼らの気持ち、感情に寄り添えるような情動的なアプローチが必要であると思われる。

２つの描画テストを形式分析し、軽度発達障害児の発達的特徴と傾向が得られた。これらのことから軽度発達障害児が、学校をはじめとする生活場面で呈する不適応状態を理解しやすくさせる結果が得られた。社会的なスキルの獲得を中心としたアプローチの重要性もさることながら、自己を表現することを苦手とする子ども達に描画テスト特に、クライエント（client）の〈世界〉に対する無意識的態度と固有の関係について明らかにする星と波テストおよび、パーソナリティ（personality）の異なる部分やレベルと関係するようにデザインされた刺激図に対し反応することで、刺激図と結びついたテーマに関するクライエントの反応や態度を理解することができるワルテッグ描画テストを実施することは、被験者とそれを取巻く周囲との関係性、またそれによる不安や葛藤などの不適応状態を把握することができると思われる。ゆえに、健常児への発達機能テストとして使えることとともに、対人関係において不適応感を抱きやすい軽度発達障害児への支援の糸口として有用性も持ち合わせていると思われる。

特に、軽度発達障害児、対人場面での不適応感を抱いている子ども達へは、言葉によらない自己表現の手段の必要性が考えられ、描画を媒介とするコミュニケーション、つまり内面の表現を通したアプローチが有効ではないかと考えられた。

## ６．おわりに

本研究は、星と波テスト、ワルテッグ描画テストを学童期の児童に実施し、形式分析によって発達的特徴を考察した。以上のことをまとめると、星と波テストにおいて、軽度発達障害児には、周囲の事物や人との関係というような外的なものよりも内的な部分に重きを置く傾向がみられ、また生活場面においては知的・精神的な側面を過度に強調している状態がうかがえた。また、ワルテッ

グ描画テストにおいては、①日常場面でなかなか表現できずにいる彼らの豊かな内面の表出がなされた。②全ての図版をとおして、喚起されるテーマに対して形式的な描写の出現率が高かった。③感情、感受性を喚起される図版（2および7）に対し、絵画的な描写の出現率が高くみられた。このように、軽度発達障害児の発達的特徴の把握だけでなく、健常児においても発達的特徴を分析したことはこれからの研究に対し有意義なものであると思われる。

今後の課題として、サンプル数の少なさがあげられる。特に軽度発達障害児に対しては、理解が得られないこともあり、描画の実施が極めて困難であった。また、描画は十人十色、一つとして同じものはない。よって、形式分析だけでなく、内容分析をすることで被験者一人一人に向き合い、そしてまた時間をかけて継続的に描画テストを実施し発達の変化や特徴を把握していく必要があると思われた。今後、今回の調査を踏まえ、星と波テスト、ワルテッグ描画テストの投影描画法テストとしての有用性を突き詰めていきたい。

（本論文は、西九州大学大学院に提出した修士論文〈平成16年度〉の一部についてまとめたものである。）

引用文献


1）渥美[レイ]子 1960　パースナリティ研究のための1つの有効な手段としてのワルテッグ描画テスト（WZT）

2）ブルーノ・リーネル　杉浦京子　鈴木康明　2000　星と波テスト入門

3）傍士一郎　2002　「星と波テスト」の人格診断テストとしての可能性

4）入江是清 1966　一精神分裂者の描画態度とWZTに関する精神病理学的考察　精神医学8（1）23－30

5）香月菜々子　小野瑠美子　上芝功博［他］　2003　星と波テストのパーソナリティテストとしての独自性について―「不適応」の見解をめぐってのロールシャッハテストとの比較を通じて

6）川崎千里　2002　広汎性発達障害の地域療育と描画　臨床描画研究 Vol 17

7）大島美紀　森山徹　伊藤良子　2003　高機能広汎性発達障害児の心理教育的ニーズの検討Ⅰ―内的世界へのアプローチー　特殊教育研究施設　研究報告　第2号　41－49

8）正保春彦　1991　中学生におけるワルテッグ描画テストの諸特徴　明海大学教養論文集　3、43－52

9）杉浦京子　2002　臨床心理学講義―実習を通して学ぶ―

10）杉浦京子　鈴木康明　森秀都　西野薫　1998　星と波テストの日本における試み－就学児童の発達機能テストとして

11）杉浦京子　高梨利恵子　2001　投影描画法テストバッテリーの検討

12）杉浦京子　八木早霧　2002　不登校児の親の会における投影描画法テストバッテリーとその意義－投影描画法テストバッテリーからみた母親の変化－

13）杉浦京子　鈴木康明　2003　心理臨床学会採録集　投影描画法テスト・バッテリーの検討　その2　星と波テスト・ワルテッグ描画テスト・バウムテストの検討

14）鈴木康明　2001　死別の悲しみへの援助

15）杉山登志郎　2002　発達障害の臨床における描画の意味―自閉症の描画を中心に臨床描画研究 Vol 17

16）杉山登志郎　2001　高機能広汎性発達障害　児童青年精神医学とその近接領域　Vol 42　No 2　114－123

17）杉山登志郎　2001　アスペルガー症候群及び高機能広汎性発達障害をもつ子どもへの　援助　発達　22巻　85号　46－67

18）寺山千代子　2002　自閉症児・者の描画活動とその表現　臨床描画研究 Vol 17

19）ウルスラ・アヴェ＝ラルマン　2003　星と波テスト　発達機能・パーソナリティの早期診断

20）ウルスラ・アヴェ＝ラルマン　2002　心理相談のためのワルテッグ描画テスト

21）Ursula Ave-Lallemant 1981 Dimensionen des Seelischen im Ausdruck des Sterne-Wellen-Tests Zeitschrift fuer Menschenkunde 45（3）

22）柳昌代　荒薪裕子　篠田直子　篠田晴男　2001　大学1年生にみる青年期の生活体験と感情体験（Ⅱ）